

夜毎／＼に渡つて居るのだ。此の廢城の歴史を思つて見るがいゝ。

大守の盃には黄金の酒があふれて、きらびやかな美人達のやさしい表情と舞袖からこぼれる香の匂ひにチラ／＼燃ゆる歡樂の焰は、むづかしい髯武者達がゆるする様な笑聲に、びつくりして可愛ゆく身慄しながらも芳純な四邊の空氣の中に毎夜ひたつて居るうれしさに燃え續けて居たのだ。噫！併しこの城内は遂に屍丘を築くに至つた。今は只尾花吹く風に物悲しき昔をしのびて英魂を吊ふもの幾人かあるらん。嗚呼これも一刻／＼に城を包んだ魔が終にケラ／＼と嘲笑つた時、壯烈な英士の最後であつたのだ。

知らぬ間に靜かに／＼移り行くタイムよ。惡魔の玩具である人間の悲しみも努力もタイムの力に誘はれて行つてしまつた。廢墟の上に毎夜／＼さ迷ふ光りよ。古城の朽ちた壁にはもう虫が鳴いて居なかつた。只愁思徒らに胸を亂して、悲風來る所に暗涙落ち、我は月行く空を仰いで動かなくなつた。

## 晚秋の或る日暮

二丙 藤野 豊

私は何時もの通り最う村々から仄かな灯がもれ初める頃になつて、「豊郷」と書いた白い板を無造作に立てられた小さな驛で煙で汚れた小さなない列車から下りた。

列車の後の方から下りたNが五六人の客に交つてプラットホームをやつて來るのを待つて其處から出た。未だ二三人後の方で話してゐる。驛長とふざけてゐる車掌の聲らしい、その聲が淋しい驛を喜ばせてゐる様に聞える。やがて全部客も乗つてしまつたと見えて、車掌の聲が急に止んだ。そして隅の方から笛が淋しい音を出した。それがよく露店等で見かける、小供小供した笛の音にそっくりなので、何んぞなく滑稽じみて聞えた。汽車はびつくりした様に汽笛を鳴らして、白い湯氣の中から動き初めた。小氣味よいビストンの音が其の眞白い湯氣の中から響いて來る、其の中に汽車は

赤黒い煙を残して見なくなつてしまつた。たゞいやに石炭の臭が鼻をつくばかりで、又元のひっそりした淋しい田舎に變つてしまつた。時折り遠くの方でビストンの音がぼんやりと聞えて來る。やがてそれも聞えなくなつてしまつた。今までそんなに氣が付かなかつたが、木や家や道や、そばにゐるNまでが何時の間にか全く灰色を帯びてゐる。遠くの方の山なんか餘程注意せねば見えない。夕暮の空氣は遠慮なく、押廣がつて最うすつかり地上を覆い盡してしまつた。其のしんみりとした空氣中に何も彼もが死んだ様にぼんやり浮いて居る。何んだか死の世界といふものはこんなものか知らんと思つたら急に寒くなつて來た。

二人は思い出した様に此の靜かな空氣中を歩き始めた。幾度歩いたか、知れぬかなり廣い道は朝來の雨にぬれてじめ／＼してゐる。一足一足歩く度に靴は無氣味な音を立て、丁度砂濱を歩いてゐる様に、足元が浮々して何んぞなく齒がゆくつてならない。向ふの方に水溜りが一つ淋しい光をはなつてゐる。その光が薄闇の中に光る度に

夕暮の其の靜かな暗を通して、自分の胸まで射通るかの様に思はれて、ぞう／＼とする。其の度に私の體はかすかにふるへてゐる。二人は淋しい夕暮の空氣にしたる様にして家路をさして歩き續けた。此の淋しい中を二丁も歩いたらう。けれどもNは一度も聲をかけない。私も口を開かない。開かうとしても聞く用事がないからかも知れぬが、實際こんなことは今日が初めてである。併しNが口を開けば、自分も開けるだらうと思つて見たが一向Nの口は開きさうもない。仕方なく又俯きかげんになつて歩き續けた。

Nも話さない。私もだまつてゐる。たゞ靴ばかりが異様な音を立てゝゐる。それが靜かなためか、不思議な程はつきりと聞えてこの靜かな空氣を破つては破つては遠くの方に消えて行くのが目に見ゆる様な氣がする。

そしてひっそりとした、夕暮の暗の中から暗の中へと葬られて行く様に思はれて、何んだか、滅入りたい様な感じを起させる。Nが早くなれば、私も早くなる。私が遅くなればNも遅くなる。そ

れで靴音はびつたりと、調子が合つて早くなつたり、遅くなつたりしても決して亂れない。はつきりと同じ様に同じ音を立てて、私達が歩けば歩くだけ續いて行く。

Nと分れて獨り松並木に差しかゝつて來た頃は最うすつかり太陽は沈んでゐた。たゞ西の方の隅が少しばかり赤らんでゐる。それも何時もならもつと明るいのだが今日に限つて變な形をした大きな雲にさへぎられて、あちらに一つこちらに二つと散らばつてしか見えない。雲間雲間から青いぞちらかと云へば、黒ずんで見ゆる空が、東の方へ行くに従つて段々大きくなつて下界を見下してゐる。最う秋もお終ひだ。つい此の間まで黄色く實のつてゐた稻は一本も見えない。悉皆かり取られて、もうりつばなお米になつてしまつたらしい。あちらにもこちらにも澤山葉が積まれてゐる。向ふの方には綺麗に竹にかけられたのも見ゆる。目の前につゝかゝつてゐる松の大きな枝も大分弱つてゐる。處々に黄いろな葉が目にはらつく。

道の兩側の淋しさ云つたらかなしい位だ。美

しかつたすみれも野菊も見えない。元氣な笹も薄も澤山あつた。稗も數へる程で目に見ゆるものは皆今にも、枯れ果てさうな哀れな貧弱らしい、姿に變つてゐる。實際何時の間に此んなに變つたかと思ふ程慘めな變りやうである。全るきり夢の様だ。併し此の秋を夢の様に暮してしまつたかと思ふと残念でならない。折角たのしい思で秋を迎へたのだつたのに……。

暑中休暇のすんだ最初の日と同じ様に此の松並木を通つて、初秋の静かな空氣を思ひ切り吸つて飛び上つてゐる私を此の道端の生き／＼した莖をつんでは此の上もない喜びに満たされて、微笑んでゐる私を静かな夕方あの山に今沈まうとする眞赤な太陽の光を浴びつゝ、我れと我が胸をいだく様にして、しみ／＼と秋の夕陽の尊大さをながめ入つてゐる私を想像して見た。そしてそれから幾日か経つた今日まで何をしてゐたかと云ふことも考へて見た。併し別にそれらしいことにも氣がつかなかつた。たゞ稻のかられてゐたことだけは頭に浮んだ。

此んなことを思つてゐたら何時の間にか可成長い松並木を通つてしまつてゐた。町に入ると青い街燈の光が道を照してゐた。家々は最う戸を立てられてゐる。人も見えない、犬も見えない、時々松並木を吹く風の音が恐しい音をたてる。秋の弱々しい所は影すらない。目に見ゆるものは皆冷かに突立つてゐる。そしてあの寒い木枯の夜を想像させる程に全り冬じみてゐる。

一九二二、一一、二九

## 湖上の月

二 丙 家 森 實

彦根の町を過ぎて佐和山の丘に上る。此處は琵琶の内湖に望み、その幅いと廣し、向ふ岸には松原つきいで、左に彦根の瓦鱗を見渡し、右に米原の驛かすかに見え、汽車の煙ムラ／＼と立上り、汽笛の音手に取る如く聞ゆ、その風光明媚なる事言はん方無し。

佐和山を下りて松原を横ぎり、濱傳ひに長曾根

に來る。來れば日は早や西に沈みぬ。此處に波止場あり。長曾根港と言ふ。棧橋を渡りて彼方を見れば、右に竹生島左に多景島あり。その夕景譬ふるにもものなし。

濛々たる煙の立上る蒸汽船は長曾根港に着きたり。我は船上の一人となりたり。

時は九月六日にして乗船後、欄によりて見渡すに、萬里渺として雲なく、暮色やうやく波聲を罩めたれど、日は未だ全く暮れず、月の出づるには猶程あらんとて、暫く眼を他に移ししが、ふと東の方を見れば、團々たる明月いつしか海を離れたり。海は碧に空は青く、水天蒼茫の間、月獨り紅玉を懸く、月やうやく高き上る、湖波月に輝きて、萬里金砂を散らし、沖に釣する漁船いさやかに見ゆ。

波は尚濱に高く波沫をちらし、海風の湖岸の姫松に颯々の音をなせると、松蟲、鈴蟲、蟋蟀の々も殊に秋氣をそへて冷かなり。

我が乗れる蒸汽船は長濱に着きたるなり。颯と吹きくる冷風に身をそらせば、あな美し。右に松

丘自然の屏障を作り、左は市區整然たる長濱の町を見る。港には我を乗せし汽船を残し途をいそぎつ顧みれば、港家影を没して船上の燈火星よりも瘦せたり。

## 我が欽慕する北條時宗公

二丙 名畑 榮一

肇國以來皇威の海外に加りたる事は僕指に追なき程である。垂仁天皇の朝に、任那に日本府を置き、次で神功皇后の三韓を征服せられてより、時に新羅を援けて高麗を破り、百濟を援けて新羅を破りしことあり、又阿部比羅夫が舟師二百艘を將いて肅慎を撃ちしことあれば、高麗を援けて唐と新羅の聯合軍と對抗し、且つ我舟師が唐の水軍と交戦せしこともありて、皇威は當に海外に輝きつゝあつたが、外敵の侵寇を受けたのは實に元兵の來襲を以て初めとし、爾來今日に至るまで未だ曾て之れなき所である。元主忽必烈が支那統一の勢を鼓して我が帝國に臨み來りし時、唯一介の使を

駛せて威嚇すれば、直に偪伏して命を待つべしと思ひ、悻悻なる書を致して我を脅さんとした。而して元使到來の報に接したる我が國の上下は、聊か不安の心をいだき、神社佛閣に祈願を籠むる者出で、至尊の御身を以て國難に代らんことを伊勢大廟に祈らるゝさへあるに至つたが、毅然として元使に臨み、初めに其書辭の無禮なるを責めて之を追ひ、次に其の軍艦四百五十隻を派して來り寇するを撃退して、斷乎たる決心を示すと共に、東國の兵馬を催發して、太宰府並に沿海諸地の防備に供し、更に筑紫の海邊に石壘を築きて、豫め元兵の大襲來に應ずるの準備を整へ、尙ほ元主の時使者を派し、時に兵艦を遣して來り、脅すに遇ふも、毫も強硬の態度を變へず、其の來使は此を龍の口に斬り、其の兵艦は之を撃退し、最後に大舉入寇し來るを邀へ撃ちて大に之を破り、殆ど其の全軍を殲殺して、終に英邁にして雄略を懷きし元主をして全然帝國を窺知するの念を絶たしめたのは、天の守りと云へども、一に即ち北條時宗其の人である。

時宗は實に對外硬の典型として稱揚すべき人である。唯だ此の人ありしに依り、當時外敵に對して帝國の尊嚴を維持し、國土を擁護し得たるに止らず、更に四方に向ひて國力を發揮し、國威を宣揚し得たのであつて、此の一大事變に際して大英斷に行つた時宗を私は欽慕すべき人物とするのである。

## 小春日の夕

二丙 名畑 榮一

太陽西山に没し草木盡く眠らんとす。かすかに耳に入る遠寺の鐘一つ又一つ、心底に響き渡り、時をあまたす歌ひ續けんとする蟬蟲の聲、さながら夕闇の中にみなぎる郊外の小徑を辿り來る友と余を歡び迎へてか、靜かに立てる木々の枝僅かに動搖するを覺ゆ。ふと異様な明るみに氣附きて後を見れば、圓々たる盆の如き明月、半ば傍なる池にうつれり。嗚呼何たる美景ぞ。空を仰げば正に雲影を脱せんとする一瞬時なり。咫尺の前に彼

方をむきて咲ける一輪の白菊、ゆら／＼と微風に動き、こぼれ落つる月光にうつれば又もや彼は目を開きたるか、風を便りとして余の方をむく、あだかも風を得て余を訪ふが如し。時に風止めば再び眠らんとし、夕の郊外は寂として音なし。

善心にかへりて

一甲 植田 廣三郎

空はコバルト色に晴れて二ツ三ツの白雲が中空に浮いてゐる小春日和の或日、讀書にあきて、フト窓より見れば、杉の木蔭で弟が一心にゴム弓でねらつてゐる。と見ると倉の屋根の鳴いてゐる雀をらしい。

面白氣に尙も見てゐると、やがて引きしほつた手を放したが、彈は雀の頭の一二尺位上を通つた。併し雀は尙一心に囀つてゐる。弟は直に二の彈をいたが、其も失敗雀は依然と鳴いてゐる。

僕は雀の様子が小面憎くなつて、つと立つて庭下駄をひつかけて弟の側に行つた。

僕「瀧ちゃんあたらん」弟「そんな事云ふてもあたらんで……」

僕は弟からゴム弓を借りた。併し此のゴム弓を借りた爲、如何なる過が起ることも神ならぬ身の知る由もかつた。と、屋根を見れば三羽の雀がもう一羽になつてゐる。キツト狙を付けヒューといったが、弾は雀の頭の上二寸位上を通つた。しまつたと同時に、あたりの静かな空氣をやぶつてがら／＼と見ると粉屋の横窓のガラスが半分かけてゐる。

弟は無言に僕の顔を見た其の視線と僕の視線とがばつたり會つた。弟は軽く微笑した。僕の頬は赤い林檎の様にほてつた。

其の時僕の良心の紅は墨の様になつて、こんな淺ましい心になつた。「僕と弟と唯二人だ。誰も知らう筈がない。闇から闇に葬らうと弟に堅く口留した。僕の胸中には惡心が揚々としてゐる。」

其のまゝ家に這入り又讀書をししたが、氣にかゝるのは今の事件。忘れよう／＼と勉めると愈々氣にかゝる。落ちついて讀まうとして本に目を

ら……橋を越えた。今一息だ。あたりはしんとして息する毎に白い煙が上る。

もう後れたと合點した。

もうかうなると無茶苦茶だ。此の大きい石垣を崩してやらうか。

途方もない事はかり考へて門をくゞつた。誰も居ない。後から一人の人が來て「早いね」と云つた。人を馬鹿にする云つて控所の時計を見たら

「何のこつちや」

七時十分を八時十分と間違へてゐたのだ。

## 二、寒き空

屋根に上りて空を見れば寒星一點、魔物の様な屋根の上に、淡黒い遠くの山に一粒。箒の様な樺は中空を摩し、枝々に星を帯びた様、風は葉の落ちたる樺を振ひ飄々、颯々。  
箒の如き樺は梢頭より小枝を大空に一面擴げる。時に北風寒く袂を散らす。

× × × × ×

遷しても、何の事だかさつぱりわからない……。こんなに苦しむなら一層の事あやまりに行かうか、さうしたら身も心もさつぱりするだらう。さうだ／＼と良心がむく／＼と頭を上げた、さうして墨の様な血汐は又元の紅の血汐と化した。

## 小品 二篇

一 乙 百々松之助

### 一、遅刻

「一寸片橋十丁目へ使ひて行つて來い。」  
「あゝじやまな」と獨り言を云つた。

溢々肩の鞆を下して自轉車に乗つて使ひに行つた。歸つたら登校時間迄にもう十五分しかない。鞆を片手に押へながら一目散に走つた。

もしやと思つて家々を覗いて見ると、まだ十分ある家や十五分も過ぎた家もある。その度毎に安心したり失望したりする。

早や僕は涙ぐんでゐる。氣の弱い男だ。さう／＼京橋通りへ出た。池田先生に叱かられるかし

## 和歌

特別會員 佐竹貞一

寛いで我が胸底に語る人

あらば大方御佛ならん

梅咲けば鶯來啼く陽春の

庭前いと麗なる哉

凍る手を机の下に押し入れて

頸縮めぬ夜氣沈々す

包みたる蜜柑のおひの雪うけて

一つよく見ゆ實のつやのよめ

夕されば北風やみぬ月出でぬ

雪皚々や星一つ見ゆ

雪暮れぬ火鉢に集ふ兄妹の

手競べ合うて父の手撫でぬ

茫然と冬の湖見るさもそれに

似たる思ひす世の味氣なや

巔は見えず掩然雲はふせ

雪の眞嵐席捲く伊吹

歌知らず筆ぞ拙く生れにしを

鵝毛芬々又抛つはよしも

なごか今夜夢いと多くねむられす

人の傳ふる奇しき身のおちありや

願ふことかなはせ給へ天つ神

初東風心しかと小胸底に

糾へる禍福の縁限りなし

千古にわたる不等平等ぞ寂

大海の波の大きく又軽く

同じ水ながら縁に動く

うちはへて春の心に我ならん

隈なく匂ふ花霞かも

色々と思ふ心を盡く聞きくるゝ

人のなきや寂しき

短歌

四甲 渡邊泰興

君は逝きぬ

我が胸の扉ひらきて飛び去りし

銀の小鳥よ今はいづくに

向ふ山に鳴ける鳥の故わかず

吾れは淋しも君をしのひて

君さわかなつかしき思ひ出はあらし吹き

夢のことくに淡くなりぬる

ひた待ちし春にはあれと君逝けは

川の流れも哀調ときく

ものなへて思ひさひしきこの宵は

君の逝きし夜春雨をふる

忍びやかに口笛吹きてなくさまん

君も聞かまし花の御園に

いたつきを見舞し折のはゝるみは

君を包みぬ花の御園に

待つ人の便りはあらしたそかれを

ねぐらに急ぐ雁を消に去る。

今はなき君の好みし紫陽花の

我か思ひ出に濃き一點を増す

泣き濡るゝ千鳥を多き淡路濱

我も泣かましい諸共に (完)

(友の死を悲しみ命日の夜)

雑詠

野中ゆき千々の蟲の音耳にして

我は寂しき秋を知るかな

湖のほとりに立ちて夕焼の

空なかめつゝ君なつかしむ

廣き野にとり残されしひな鳥の

家路も知らでまごひぬる哉

紅々とはのほの如き睡もて

我にせまるよ夕焼の空

すゝりなく聲する方をながむれば

うれひに沈む少女子を見ゆ

なすこともなく過しけりこの我は

こん新春や如何に迎へん

星もなき今宵しみゝ思ひけり

生れて死するわが運命を

貧てふ苦き藥をなめつゝも

勇みふるひて我は立つなり

便りなき君は如何にと待ち侘ひて

出つれば渡る初雁のむれ

詞藻

和歌

三乙 桑原利夫

そゝろかに土になくこそかなしけれ

暮秋の宵の名も知らぬ蟲

ふきもせて見入るひとみのまばたきに

ひとつおちたりあつき水だま

わが心廣告燈に似たるかな

秋の浅夜になきわらひする

いにしへのひともしくけむうすぐらき

土牢にあわれ晝をなく蟲

ふとみたるまろびねのゆめかたりつぎ

父か笑へはみんな笑へり

ふるさどにかへりゆく夜の雨ぐもり

廣告燈を汽車にみてすぐ

汽車にみる仁丹の灯のさひしさよ

夜ふけてすすくる雨あがり街

ふもと路や灯としごろのさある町

雨のはれまをわか汽車は過ぐ。

待春

二乙 宮田徳太郎

のどけき春よすみやかに  
ながあたゝかき光もて  
のやまの雪をどかしつゝ  
うきよのそらにきたれよや  
のどけき春よすみやかに  
なれがいみじき月もて  
のやまにはなをささみつゝ  
うきよの空に來たれよや  
のどけき春よすみやかに  
なれかやさしき呼吸をもて  
かんばしきかをおくりつゝ  
うきよの空に來たれよや  
のどけき春よすみやかに  
なれかたへなるこわねもて  
たのしき歌をうたひつゝ  
うきよの空に來たれよや

俳句

特別會員 白鳴子 佐竹貞一

十一月の句

落葉ふむ音に心を残し行く  
行雁や胸快き力撃  
初時雨飛石のぬれの並ふなり  
木枯に追はるゝ人の尻のわれ  
獨居て手の裏を見て初火鉢  
初霜や地殻三寸しまりつく  
柿の葉皆落ちたる畠明き  
刈後の株ならへる田朝なり  
野鳥の騒き稻こけぬ時雨  
木枯の止める朝ひつそりとしぬ

五甲 長田顯亮

月のさすお城の石や葛  
あの森の煙こひしや秋の暮  
煙立つ草家は遠し秋の暮  
人の行く方に日の入る枯野哉  
北風や眉をひそめて女行く  
寒月を吠ゆる犬あり村はずれ  
芋買ひに行きし夜もあり冬ごもり  
舟をやる人もあるかな冬の川  
鳴き連れて歸る鴉や月寒し  
名月に尾花切り居る尼法師  
冬の月路のみ光る夜なりけり

四甲 角田芙蓉子

易水に友送る夕の寒さ哉  
苦むすぶ佛の顔の古びかな  
病む妹始めて梨に口動かされ  
灯暗く病人眠らずひざ寒し  
白衣僧歸路を急ぐ枯野かな

秋十題 二丙 北川壽三

電線の上を飛び交ふ黒はじろ  
花の雨晏起の布團いざ上げん  
又雨くへし屋根の上の野鳩哉  
明燈に病める妹の顔の陰影  
鍬荷ひけふる梢の鳥をさく  
何侯の墟であるぞや麥二寸  
濱祭泣くは誰か子そ母にはづれて  
約束の人は來らて春の雨  
田代や野路行く乙女の足袋白し  
松原にねる娘は誰を鍋まつり  
看護のひまうつゝと長き夢なりし  
逢ひ見れば狂女なり鳧臚月  
物の怪の襲ふか如き秋の風  
空高く一鳥寂し秋の暮  
朝寒や君か煙草の良き句ひ  
しめやかに白萩に雨の日暮るゝ  
掛け稻のしきりにそよく夕かな  
落書よむ山門の秋の夕日哉

筆なけて徒に見む秋の月  
秋日和高き檜に百舌のなく

私のノートより 二 丙 藤野 豊

濛蒼しどんぼつる子に氣を付けて  
走る金ペンかすかに光をもちてくれけり  
生徒呼ぶ教師の聲ひゝかする運動場  
ふと見れば静かにも我か帽子かゝれり  
誰か食へたかバナ、の皮机の上にあり  
夜更けて泣くや蛙の聲揃ふ

新 體 詩

五 乙 西山 利 員

遠 征

一、空をも蓋はん大鵬の  
翼となせる我かオール  
圖南の雄圖勇ましく  
征途に上る雄々しさよ。

二、日は焼きつける水の上に

オールの響勇ましや  
行手を遠き浪枕  
今日は今津か大溝か。

左手に遠く沖の島  
白鳥群かる白石や  
右手には近く白鬚の  
神も知るらめ我か雄圖。

岸を色どる深みどり  
白き真砂子や雄松崎  
恨を積る比良の雪  
溶かさて如何で歸るへや。

堅田矢走と漕ぎ行けは  
やかて唐崎一つ松  
無念の過去を追憶の  
松の雫か袖の雨。

さらば別れん我か友よ  
母校よ行かむいさゝらは  
明の明星冷やかに  
朝霧深し金龜城。

我は湖の子、磯に生ひ  
たわぶれ遊ぶ浪の花  
逆巻く浪も龍巻も  
如何て恐れむ恐るへき。

鍊り鍛へにし腕もて  
遠き舟路を凌かなむ  
東伊吹の嶺近く  
はるかに望む賤ヶ岳。

吹く朝風に送られて  
歌の名所訪ぬれば  
西國三十三ヶ所や  
古き傳の竹生島。

古き名所を後にして  
永き舟路も恙なく  
清きさざりの小波や  
志賀の都に入りにつけり。

三、時こそ來れ我か腕  
振ふは今を此時そ  
弓矢八幡神かけて  
祈り禱りし我か武運

蛟龍飛びて浪怒り  
虎嘯きて風起り  
震ひごよめく湖の上  
舷々摩して花を散る。

此處を最後の闘と  
奮へど今は如何せむ  
心はかりははやり緒も  
病みし體は如何せむ。

成敗遂に定りぬ  
敗れし者の悲しさは  
勝たては歸らしと期せし身の  
如何でか友に答ふへき

涙に空もかきくれて  
日も夕雲に沈みけり  
無常を告ぐる入相の  
恨を深し三井の鐘。  
(終)

## 彦中健兒逍遙の歌

五丙上野中

一、我が日の本の花をみる  
風光明眉の鴉の湖  
碧き湖畔に影寫す

二、一たび金龜の地を踏めば  
封建時代の名残りなる  
天主やみ濠老松の

三、稀世の英傑直弼の  
血を受けたるか六百の

健兒の意氣は天を衝く  
驚天動地の策源地。

四、それ絢爛の時の世に  
生氣剛健隆々ど  
堅固な思想を楫として  
船出せしより四十年。

五、神秘の光キラ／＼と  
天主のみ空に輝るとき  
城頭かすかに佇むは  
靈氣に育つ健兒なり。

六、時に歸る羽ばたきに  
暮るゝや琵琶の太湖  
眞晝の如き月光に  
無言に寝る金龜城

## 觀喜の涙

思へば昔幾歲か

金龜城下に開かれし

體育主催の大會に

岐滋の諸豪の集れる

ベースボールの大會に

いとも名譽の譽ある

チャンピオンレースは他校へと

踏みにじられし校庭の

慘鼻極めし戰の

跡を眺めし健兒等の

受けし創痕新しく

無念の涙ホロ／＼と

あはれや過去の我が彦中

手にせし覇權他に移り

懷舊の涙サント／＼に

たゆる暇なき我が思ひ

雪がでなるべき會稽の

堅忍不拔に鞭上げて

臥薪嘗膽幾年か

忍努力幾歲か

勉め勵みし甲斐ありて

詞藻

時の十月十七日

いとも燦たる桂冠は

遂に我手に歸しにけり

授けられし優勝の

旗を握りて選手等の

若き瞳はうるほひて

感慨無量の涙しぬ

(岐、滋野球大會の優勝旗授與式を見て)

親友の死を悲しむ

あはれ昨日の言の葉は

今日の煙とたち去りぬ。

親しき友は今早や

音づれもせぬ人ぞかし。

思ひ出づれば手をかはし

野邊の花見し楽しさも

山に遊びし愉快さも

過ぎし昔の夢となり

昔の夢を今に見る

術も嵐に花ぞ知る。

八七

花咲かざらば散らましや  
友なかりせば別れめや。  
あふ嬉しさのやがて又  
別るゝ種となりぬなり。  
空蟬の世ぞあはれなる。  
げに空蟬の世ぞあわれなる。

さびしき追憶

昔の夢は今さめて  
戀にし君は去りゆけど  
君しのばる我が胸は  
ほのかに照りいる三ヶ月の  
淡き光を脊にあびて  
思出多きすぎし日の  
ありしくさ／＼めぐらせば  
折から響く笛の音に  
悲しさ深みあはれにも  
おつる涙は一しほに  
沈める胸をひたしけり。

君は逝きぬ

思へばすぎし五年の  
春の頃より親しみて  
共に語らひ唄ひてし  
自然の山川そのまゝに  
残れど君は今何處。  
呼べど叫べど歸らぬ君は  
何時の世にてぞ答ふらん。

我れは淋し

悲しきわれはみちのべに  
淋しく咲ける名無草  
ふみしだかれし花のごと  
胸の庭にてつちかひし  
想ひは春を迎ふれど  
霜おちそめし秋の野に  
別れを惜しむ花草の  
思ひになどかかはらめや。  
おゝ君逝きぬ。我淋し

銀の時計

三乙 脇坂榮二

夕暮の淡き心に  
銀の時計を掌にのせて  
あれば  
銀の地肌の冷に冷に  
なにか寂しくものを思へり。

チクタクと  
不思議にも、絶えず營む小さきものゝ命も  
かなしや。

暮れゆく空の如く  
淡き心になにか寂しく  
銀の時計を見てあるしはし。

月夜

まなこをさちて歩めば  
たゞ青し  
開けばまた  
常に青し

いづこまでも

今宵は青き月夜なるかな。

わかれ

二人は盡きぬ名残を措んだ  
果敢ない運命を呪ひつゝ。  
机を並べた六年の月日は永かつた  
それも今となれば短いものだつた。  
別れるど何故悲しいのだらう。

人生は果敢ないものだ云ふ。

親しい二人

喧嘩や爭論をした二人

會うて別れるのが何故悲しいのか

學びの道に限りなく

彼は南の果へ我は東へ

懐しい此の地を今日離れて行く

淡い希望に身を任せて去る。

思へば過ぎつる日の如何に慕はしいことよ。

名残は盡きぬけれど

時は刻々に移つて、愈其の時が來た。

帽子を打振りながら

南へ東へ次第に遠ざかりつゝ

森影に見えなくなつた彼の姿

市の天守が夕日に映ゆる

悲しい今日もやがて明日となるのだ。

嗚呼復何時會へるか知らん。

嘆かほしいがこれも皆

神が我を試鍊して下さるのに違ひない。

八百萬の神様に感謝せねばならぬ。

懐しい市に残れる友よいざゝらば。

何時の頃か再び來らん我は

功なり名遂ぐる其の日を待つて

今日の此の日を憶ひながら行くよ。

健在なれ我が友よ。

鳥が時へ飛び歸る。

今一度と市を見返れば

歸り行く友の一群が立止つた。

何と悲しい此の別れ此の出來事。

x x x x x

漢 詩

特別會員 石羊 佐竹貞一

詣 天寧寺

踏坐禪林古佛前。

四觀寂滅悟機發。

茂林鬱々路羊腸。

眼界三千皆不染。

晴嵐似水隔凡緣。

幽邃碧苔山磴滑。

三乘鐘韻白雲巔。

淨土觀來性自圓。

洗塵衣鉢散天香。

突兀登來古法堂。

蜜樹晴嵐雨後鮮。

三生香火訂清緣。

三香火訂清緣。

三香火訂清緣。

三香火訂清緣。

秋 雜 詩

金風蕭蕭拂欄吹。

半夜詩談客辭去。

滿天涼氣大湖秋。

寥落平生還自笑。

蕭條月夜思紛紛。

孤客憶家多感慨。

蟋蟀微吟月落遲。

一天寥廓斗杓垂。

薄暮援簫自斷愁。

白雲飛盡北山頭。

過雁一聲何忍聞。

丁々遠杵響秋雲。

酒旗風冷日光微。

聞怨誰家早鎖扉。

遠山縹緲水如絲。

少女纖妍插菊噲。

丹楓早已彩南關。

遙望燈々北越山。

寺在米原村以庭園有名。

行踏曉霜忘病骸。

丹楓點々在懸崖。

携瓢引杖訪荒村。

翠竹凌霜半子孫。

重々冬貯壞天恩。

一望山河醞藉存。

偶陟江樓伴野賓。

風輕日暖心如夏。

霜楓樹外斷崖堙。

霜楓樹外斷崖堙。

霜楓樹外斷崖堙。

霜楓樹外斷崖堙。

樓清玉露滿田疇。  
且喜今年十雨足。  
晚來端坐度中宵。  
一點殘燈青焰冷。

送森下先生赴干任福島覺

特別會員 愚山 大和田清朗

氣骨稜々存學風  
白河關北多奇士  
十年無變見愚忠  
啓發依君雄更雄

運動會

赤鬼城中秋正閑  
腕鳴脚躍人如虎  
全疊意氣突洪瀾  
一萬觀賓肝胆寒

又

博得湖東赤鬼稱  
爭技應有仲由概  
秋高意氣駕龍昇  
敗不羞兮勝勿矜

暮秋次佐竹先生韻

微恙兼愁扉不開  
前庭落葉無人掃  
飛雲遠屋犬聲哀  
颯々晚風敲牖來

晚秋處見

詞 藻

三秋將盡君須醉

身賤何知亟相瞋

雪曉

無風籬竹作風聲

無月紙窓如月明

早晚噪醒妻孥起

銀乾坤裡靜傾觥

登金龜城有感

四甲 瞻岳 角 田

清

金龜城接蔚藍天

激灩晴湖鏡面鮮

朱閣參差蒼樹外

青山縹緲白雲邊

英雄弱業消沈後

兒女笙歌願望前

追想往事多感慨

夕陽滿地淚潸然

楓峽曰

七律雄麗渾成有讀盛唐傑作黃鶴樓鳳凰臺諸詩之感

井伊直弼

鬢眉爽仰豪風

開國傳來竹帛功

詠櫻

櫻花秀高何所比

宛然日本丈夫魂

楓峽曰

暈碧裁紅之筆、槐麗清新之詩、翻々動人、一讀消魂

又

情郎畢竟是無情

漫典春衣洗酒觥

又

嬌兒索乳叫深宵

月色淒涼魂幾消

又

月光鬢髮照汀洲

漁子回船湖上流

又

世事如咬菜

於吾素澹然

又

坐臥悟因緣

煮茗開松籟

又

箇中存道味

呼傲最乘禪

又

題

畫

彩霞衝曙色

深樹曉氤氳

又

詞藻

潑萬作出雲

簾前飛抹白

擔風曰不改一字自然穩貼、膽岳詩境又進一層

又

花香草色襲裙腰

隔岸樓臺春似招

又

水禽驚起灤烟低

相喚漁郎望不迷

又

款乃一聲天欲曉

殘蟾挂在數峰西

又

綺陌香街人事閒

賣花聲和賣錫聲

又

看花兒女鬪嬋娟

中流誰放木蘭船

又

度水絃聲春動蕩

彩霞蒼夕置暮灣

又

數樹紅楓秋若畫

丹青一幅夕陽間

又

荷花菱葉白鷗洲

蟹舍漁莊隣酒樓

又

半是榴花半絲竹

月明三十六灣秋

曉起

烟抹山家隔數峰

一聲何處響晨鐘

又

清溪漱去鶴爲伴

坐對寒流石上松

又

一幅瀟湘景

恍疑書裡逢

又

山色黛螺濃

暗柳藏朱舫

又

虹橋誰眉語

明花難翠松

又

扶醉女奴從

湖光盞鏡耀

楓峽曰 二律盛唐之氣格第一最傑

消夏絕句

苦碧花香泉石鄉

簾紋如水夢痕長

又

小窓移榻蟬吟底

伏日健人松氣涼

又

風前滴露濕衣襟

竹裡流螢影欲沈

又

半夜涼棚人散後

獨逸明月撫幽琴

又

楓峽曰 消夏好絕句

送川嶋丈內先生

與擔風師遊木曾川作

步○到○大○江○頭○ 溶○々○江○水○流○ 紆○紆○涼○意○滿○  
津○樹○夕○陽○浮○ 別○浦○誰○家○笛○ 歸○帆○何○處○舟○  
秋○光○渺○無○際○ 鱸○膾○引○鄉○愁○

憶兄 兄時在遼陽

雲○山○合○杳○久○離○居○ 奈○此○迢○々○音○信○疏○  
夢○裡○分○明○俱○握○手○ 醒○來○枕○上○夜○窓○虛○

生日偶成

傲○霜○露○全○清○節○ 東○離○秋○色○不○堪○情○  
不○負○風○流○隱○逸○名○

又

笑○與○黃○花○結○夙○緣○ 俱○迎○重○九○對○芳○筵○  
休○論○身○世○周○郎○蝶○ 夢○裡○秋○風○十○八○年○

楓峽曰 予生于花朝、君生于重陽、雖春秋異時

其風流夙約則一也、而二首與花爭妍  
百回誦吟不倦、予之生日六絕已失顏  
色矣

秋夜偶成

燈○光○旗○影○隔○汀○洲○ 紅○袖○翠○鬟○誰○倚○樓○  
茉莉吹香人語白 月涼風爽可憐秋

大正壬戌九月七日當陰曆七既望乃與知友謀  
設憶蘇會於菖湖、以擬東坡赤壁之游

舉○杯○屬○客○酌○還○歌○ 潑○瀾○香○魚○翻○玉○梭○  
後○八○百○秋○同○此○月○ 眼○前○髣○髴○老○東○坡○

楓峽曰 風流雅會、緬想赤壁、予雪樹隔絕、  
不得、陪遊是可以惜也



### 本校記事

四月

○八日 前川教諭新任式及始業式舉行。午後一時入學式を行ふ。○十日 對面式及び寺島教諭の告別。森脇教諭の新任式舉行。○十三日 宇曾川堤へ野外遠足をなす。○十七日 中島教諭の新任式舉行。○二十七日 英皇儲殿下奉送。○二十八日 同上。

五月

○一日 創立記念式舉行。終つて水上運動會あり。○二日 昨日に繼いで運動會をなす。○五日 川島教諭の告別式舉行。○九日 久野書記送葬に付會葬。○二十二日 及川教諭の新任式舉行。○二十七日 荒神山校庭間の部隊競走を行ふ。○二十八日 海軍中佐柴田七郎氏の講話あり聴講。

六月

○一日 學藝會開催。○十日 同志社大學總長海老名彈正氏の講話聴講。

七月

○三日 浦上教諭告別式舉行。○自七日 至十三日學期試験。○十七日 森下教諭告別式舉行。○二十四日 終業式を行ふ。○二十九日 東宮殿下當彦根驛御通過に付奉送迎す。○三十日 明治天皇御十年祭遙拜式舉行に付參拜。○三十一日 東宮殿下御還啓に付奉送。

九月

○一日 始業式並に中島若林二氏の紹介式舉行。○十五日 古市教諭の就任式ありたり。○二十日 招魂社に參拜。○二十八日 佐和山神社に參拜。○三十日 寺尾教諭の紹介式舉行。

十月

第四學年修學旅行記

四甲 川瀬武三郎

○四日 學校長の消費節約に關する講話あり。  
○七日 田中教諭の新任式を行ふ。○九日 祝勝庭球大會舉行。○十六日 角力大會を舉行す。○二十日 學藝會を行ふ。○二十三日 祝勝野球大會を開く。○二十五日 運動會豫行演習をなす。○文部視學委員大谷武一郎氏來校。○三十日 學制頒布五十年記念式舉行。○三十一日 天長節拜賀式後陸上大運動會開催。

十一月

○四日 第四學年生徒修學旅行の途に就く。○八日 第一學年生徒大溝へ遠足。○九日 第二學年以上西明寺へ遠足。○十日 井伊直弼公誕生祭に參拜。○十三日 行幸啓記念式後武道大會を行ふ。○十四日 早稻田大學教授岸本能武太氏來校。○十八日 皇后陛下御通過に付奉送迎す。○自二十四日至二十五日 發火演習舉行。

十二月

○二日 第四學年生徒の父兄會を、○四日 第五學年の父兄會を開く。○十九日 終業式を行ふ。

我等の樂しみ待つてゐた旅行、其の話の出たのは十月の下旬であつた。私は春の東京博見物の修學旅行が人員不足の爲、中止となつたので、此の秋は最早ないのか知らん、如何なるのであらうと案じてゐた。何故なら、十月の始頃になつても旅行の旅の字も耳にすることが出来なかつたから。而して毎年十月の初つ方には、旅立ちが例となつて居るから、併し僕の案じを喜びと化した。即ち草枕を結ぶべく先生からお話が出た。僕は平和博見物に行くべき餘裕がなかつたので、實に残念に思つてゐたのであつた。若し秋期旅行が行はれたならば、是非行きたいと希望して旅行費を小使錢から、さいて積み立てゝゐた。幸に旅費丈けの積立金が出来たので早速、父母に御許を願つた。僕一個の心で賛否を決することは出来ない、其の時の所が快く承諾の言葉を與へて下さつた。其の時の

喜びは今想像することも出来ない。

日は段々と接迫して来る。併し我等の間には、十一月の下旬だらうと、噂し合つてゐた。何故なら十月は、中旬に野球大會、下旬には運動會が開かれ、其の應援、準備に忙しくて、とても其の間には出来ないだらうから。

月日は絶えず走つてゐる。旅行についての確とした話を決めなければならなかつた。或日の事、○先生から旅行賛否者に就ての調査があつた。僕は皆の者が、賛！賛！と答へると豫期してゐた。其の期待に満ちた心を落膽の谷底に陥れた。第一人から、否！否！と叫ぶ聲が続いて聞けた。唯僕と他の二三人の番になつて、賛！と先生の耳に響かせたのみであつた。而して其の賛の聲は勢を失つてゐた。其の響は異様に室内に置つたらしい、皆僕等二三名の顔に視線を集めた。嘲笑する様な目付きで、此の様に、實に景氣の添はない旅行であつた。而し僕は思つた。不賛成の彼等の中には眞の不賛成者も居るだらう。が而し大部分は嘘偽の返答をして居る者と思つた。彼等の心には、「大

部分の人が行かないと云ふから、自分丈行く云ふのは恥かしい」といふ弱い心があつたらしかつた。僕ははいひたい、彼等に對して、「弱き者よ汝等は」と。又「眞に旅行の價值を知る能はざる無智者よ」と、叫ばざるを得ない。

併し僕も弱き者の仲間にあるのかも知れない。否、其仲間にあるのだ。併し此の弱き者の中から脱しよう、常にあせつてゐる。故に出来るだけ強者になるべく努めてゐる。だが此の様なことをいふのは、得手勝手な云ひ分かもしれない。又自分が行きたいからさう云ふのかもしれない。此の様な有様であるから。先生は再考を促され、十五日頃迄には、決定する様にこのお話があつた。其れからといふものは、日々勧誘に勤めた。此の好時機を逸しては我等の損であるから、勧誘するに「強者たれ、價值を知れ」の二つを以てした。

其の勧誘法は或は他人の自由心を束縛する様な手段であつたかも知れなかつた。併し其勧誘は功を奏して、段々と數が増して來た。殆んど定員に七八人不足する所迄で漕ぎつけた。定員といふの

は八十人——全数の三分の二である。殆んど定數に垂々として、やれ一安心と胸撫で下した。又勸誘に勤めた。併し今度は容易に増加しない。十五日を過ぎてまだ。最早増加は追つかないと思つて方向を轉換して、先生の方へ、「何卒出来ただけの人数でやつて下さい」と懇願した。併し頑として聞き入れて下さらない。僕等は自然と強制的勸誘となつて來た。又先生達が無慈悲である様に思へ自然恨む心も湧いて來た。遂に——定數に足が届いた。愈行はれることに決定した。

最初の失望は、歡喜の満ちた、春の野邊に花から花へと舞ひ歩く蝶の様な實に楽しい心と一變した。

此の時の心は實に少年時代にある無邪氣さ其儘である。實に無邪氣だ。其の無邪氣さに可愛い所がある様に我ながらさう思つた。顔はと見れば親爺臭いが。日が近づくにつれて喜びの度は増して來る。然るに此處に又暗礁が現れ出た。といふのはかうだ。或日の放課後物理室に集合を命ぜられた。僕は旅行に關係した事柄だらうと思つてゐた。

怒等の熱狂してゐた野球。熱狂の甲斐あつて見事敵軍を惨敗の憂目に陥らしめて、我は榮ある月桂冠を勝ち得て、月桂樹下で其の香に咽び盡したのであつた。

又陸上大運動會も盛大裡に閉會を告げ、十一月に一步踏み入れた。一日も過ぎ二日となつた。案内書が與へられた。其の案内書は實に詳しいもので、規則立つた、紀行文なんか作らなくても唯少しの文の續きを加へたならば立派な文を作ることが出来る程のものであつた。此の日も最早去つて愈出發の前日となつた。心は何となくはなしに、さはさとして落着かない。放課後校長先生からの御注意があつた。其の御言葉の中に此の旅行は遊山等に行く様に、面白いおかしいものではない。苦しみの旅行である。自ら苦を求めに行くのである。と。實にさうである。既に苦しみの峻峰も、失望の谷底も、愉快な嬉しい春の野邊も、通つて來た。

鏡の様に滑かな水面も楽しく渡つて來た。と思へば、暗礁にも衝突した、淺瀬にも乗上げた。喜

すると「驛と、交渉の結果団体としては十一月十二日迄は、運輸不可能。十二日以後も確とした斷定を下すことは出来ずこの事だから、中止か、又は十二日以後に延期するか二つの道の一つに決定せなくてはならない。それで諸君の意見如何」と先生達から僕等に相談された。僕は氣を腐らして仕舞つた。今迄の骨折も水の泡にならんとしてゐる危い際に立つてゐる。「なんだ、こんな話かどうなつたなれ。」と。併し又如何かして行きたいと思ふ心が勝利を得て色々、行ける様な道を考へ求めた。彼方の隅でも此方の端でも首をひねくつてゐる。此處によい考が湧いて出た。其れは冒險。話は此の冒險に決つた。冒險とは學生二割引券を使用して行くことである。此れについても先生達は心配せられた。全部同時に無事に乗車出来るかと。出發の日は三日(十一月)此の如き種々波亂を生じて確實に決定したのは、運動會の前日頃であつたが其後日割變更があつて四日となつた。漸く元の楽しい嬉しい心と波は靜まり、落着を得たと同時に層一層の愉快を加へた。

怒樂愁は交々我が心に起つたのであつた。が遂に喜の一字の中に萬事納まつた。扱てこれからは身體の苦しみとなつて來るのだ。又諸先生から服裝とか携帶品等に就いて御注意を與へられた。斯くして喜びの中に歸宅して準備に着手した。あれも此れもと、心がまご／＼して、實に忙しい。漸く午後八時頃になつて整つた。翌日の出發を夢見て、心は既に汽車に乗り移つて、床に就いたのは時計が九つの打撃を與へた時だつた。併し何時になく目は冴わて容易に閉ぢない。閉ぢないと思つてゐる内に上下の睫は手を握つてしまつた。心も安樂世界へと飛んでいつた。

安眠の夢は破られた。其れは三時であつた。併し家の人は未だ起きてくれない。否一番鶏の聲さへも夜の靜さを破らない。勿論五時頃に起きて頂く様に頼んであつたのだが、妙に心はいら／＼して「なせ早く起きて呉れないのか知らん。いくら五時といつてゐても氣を利かして起きてくれればよいに」と其の落着き正直さがも／＼かしくて、遂には腹も立つ様になる。時計の五つ打を待ち詫び

た。時計も何時になく早く進まない。僕等の都合の悪い。試験の時等は早駆けで進むのに。時計迄が自分を馬鹿にしてゐる様に思へる。無理に進まない様に思へて憎らしくなつて、一層いら／＼して来る。腹立ちまぎれに、うつ／＼と眠つたと思ふと揺り起してくれる者があつた。即ち母が「起きよ」と時間に間近かくなつたのを告げて下さつた。がばとはね起きて手水を使ふやら、腹に火薬を詰め込むやら、身拵へに忙しいこと甚しい。何か忘れ物は無いかと。漸く用意が出来上つた。服も着けた。靴も穿つた。ゲートルも付けた。扱て父母に一時の告別をせなければならぬ。扱て云ふと涙が何となくはなしににじんて来る。人が感情の動物たる以上止むを得ないことである。如何な人でも眼の玉を潤すに違ない。其の別れもすましていざ我家を一步踏み出した。併し僕は自分の望む旅に出て行くのではあるが、懐しい、父母の膝下を離れ、暫しの間とは云ひながら、我家を後に歩を進めるのは、氣持のよいものではない。間に寄る母の姿も見なくなつた。我家の屋根も

最早。何時の間にか足は停車場の方面に向つて進んでゐた。驛に集る友の姿は一つも見當らない。又心配が襲つて来た。時間を間違へてはゐないだらうか。確かに七時集合だと思つてゐる。若しも時間を聞き違へてゐて、既に彼等は出發してゐたなら其時しお／＼として歸る僕の惨めな姿を思ひ浮べて見ると胸は一杯になつて来る。兎に角、急いで行つて見ようと思つて、頭を持上げて、いざ急がうとした時、一人の友を見つけた。此の友の姿は僕の今迄の不安を一掃してしまつた。友のこやかな視線は、僕のものど交り合つた。其の友は〇君だつた。「やあ、お早う」と挨拶を交しながら肩を並べて進んだ。「よい天氣だね」と〇君は云つた。僕は今の今迄、天氣のことは氣が付かなかつた。唯雨が降つてゐないといふことだけ。實によい旅行日和である。太陽も、目の露を拭つてくれて尙一層僕を活々とした。(以下記録係に譲る)

x x x x x

〔澤田金次郎  
小川孝一〕

十一月四日 古人曰く「學生中の最樂は眞の知己讀書旅行である。」と。晩秋四日午前七時彦根驛に集へる七十の健兒は、今血湧き肉躍るの機會を得て近畿の旅路に上らんとす。白々と明行く西の空に頑然と構へたお城の山は、我等が門出に際し名残を惜むものゝ如し。蒼穹は恰も青繪具を融いた様、その間を緩かに秋の雲が流れてゐる。

我等一行は上松・山本・小島三先生の引卒の下に幸多かれと見送り給へる伊藤先生となつかしき金龜の御城を顧眄しつゝ、午前七時四十二分汽笛一聲と共に今や彦根驛を後にしたり。本日の行路は奈良。興味溢るゝ窓外の景色又秋色を帯びて佳なり。車内雑談合唱嬉々として時間と空間との變化を知らぬ。暫くにして内海を右にし近江富士を左にし、野洲川を渡りて草津に至る、間もなく汽車は逢阪山の隧道に入る。隠然として溢るゝ意氣を鬱塞すること約三分、遂に猛々たる黒煙を中に渦巻きたるまゝ、明るき世界に出で、稻荷山と小栗栖

山との間を縫うて稻荷を経、暫くにして思ひ出深き京都に着す。正に九時三十五分。ブラットフォームにて一同整列を爲し、奈良線に移らむと五分の時間を争ひあせりたれど、九時四十分の列車の既に發せし後なりき。己むを得ず次に約一時間待たびたり。先生方には當日の豫定に惱めらるし。纔かに十時發にて汽車は又もや優勢に進行す。「賀茂川」と誰か叫ぶ聲にぞ我等は盡く昔時歌に詠まれし秀麗なる水に注目せり。伏見に達す。尙行けば左手に桃山御陵並びに乃木神社を慕ひつゝ右手に電車と競争。實に痛快極りなし。宇治に接迫せば世にも名高き銘茶の本場、此處こそ茶園又茶園驚かざるを得ない。少し進めば誰しも眼に留る愛らしき柿、殊に名残惜しげに柿色を帯びて熟せるを見る。奈良線に乗りて更に留意せるは稻穂の刈取なり。何處に眸を轉ずるも一つとして刈られたる田は無し。玉水驛に到りて皆今來た事の如く口々に收穫の遅きを論ず。誠に近江と比ふるに略一ヶ月の差はありしならむ。上狛の附近には家屋の構造に一風ありて頂に鯉木の横に渡せる家

處々に點在せり。間もなく汽車は木津川を渡る。河幅狭けれど水清らかにして全面小砂なるこそ珍し。木津に着す。本驛は關西線の連絡地なり。愈次は奈良驛。遂に奈良にて下車せり。驛を出づれば直ぐすじ向ひに宿屋は我等を待顔にぞ迎へたり。携帶品を其處に預け、案内者二人を先登に、春日、大佛博物館へと近畿旅行の第一歩を踏み、奈良の三條通をば元氣に満ちたる足並にまかせつ、話は口に委ねつ、したり顔にて練行けば見るもの聞くもの何となく異様なり。よく見れば道路は稍爪先上りなり。路傍の肆郎には霞酒、墨等を賣る。少し行けば左に開化天皇御陵あり。(參拜せず)やがて興福寺の五重の塔目前に聳ゆ。右に猿澤池あり。采女の身を投せし跡の楊柳池畔に靡く春日神社に通ずる大路の南、即ち興福寺の南屋下に湛へたる周回三町足らずの小池なるも、鯉躍り群鹿其池畔の柳下に戯れ興趣多し。わきもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻を見るぞ悲しき。我等は此の奈良公園を行きて奈良帝室博物館に向へり。大鳥居の南東に接近せる洋風の建物にして明

治廿七年の創立なり。其陳列品は歴史・美術・工藝の三部に分れ、皆優秀なる寶物なり。此處を過ぎて東大寺に至る。大佛殿は東大寺の金堂なり。殿内に金銅製の盧遮那佛の坐像を安置す。是即ち世に名高き奈良の大佛なり。像の高さ五丈三尺五寸、面長一丈六尺、面廣九尺五寸、鼻孔の徑三尺、拇指の長さ四尺八寸、周四尺二寸、鑄料熟銅七十三萬九千五百六十斤、白蠟一萬二千六百斤、鍊金一萬四百三十兩、水銀五萬八千六百兩なりと。抑此堂は聖武天皇の勅願により建立したるものなりしが、平重衡に焼かれ、佛像の首の焼かれたるを後白河法皇賴朝に命じて再建せしめらる。後正親町天皇の御代土豪の戰爭に堂宇再び焼け、佛像の首また落ちたり。筒井順慶之を惜み佛像の修理を加へしも、堂の建立出來ず、久しく風雨に暴されたりしが、公慶と云ふ僧また千辛萬苦して時の徳川將軍に力を借りて造營し工を竣へたるは寶永五年にして、今を去る百九十餘年現存する堂宇は即ち是なり。仁王門亦頗る宏大にして、高さ十四間餘左右の仁王は湛慶運慶の作なり。案内人は三月堂

に進めり。本名を法華堂と稱し、本尊は觀音にして、脇士は梵天帝釋の二像とす。此像は乾漆造りとして漆と布にて張上げたる中空のものにして、世に珍しき作なり。其外の佛像一として珍奇ならざるものなし。奈良第一の古建築にして、人をして天平時代の建築を偲ばしむ。堂は良辨僧正の建立にして、千百六十餘年を経たるものなりと云ふ。二月堂は三月堂の隣りに在り。僧良辨の弟實忠和尚の建立にして、十一面觀世音を本尊とす。堂の下に有名なる良辨杉あり。御松明は(毎年三月一日より十四日迄)二月堂に行ふ。法事中に焼くものにて、其十二日目には籠松明又は犬松明と稱へて、長さ四五時間の大竹の端を割りて松の割木を取込み之に火を點じて堂の廻廊を擔ぎ廻るを式とす。此夜明には御水取と云ふ行事あり。堂内にある若狭の井より七荷半の水を汲みて年中の御供水とす。水取や籠りの僧の杵の音。芭蕉

次は春日神社に詣づ。春日神社は春日山麓に在り。案内者の説明に依れば、武甕槌命外三柱を祠れる官幣大社なり。四宇百五間の廻廊左右に渡り

境内甚だ廣く、老杉森々として茂り、自ら神威の嚴かなるを覺ゆ。一の鳥居を過ぎて社殿に詣づる兩側に奉獻の石燈籠隙間なく列る其數二千。社殿の軒に吊る、釣燈籠一千個と稱す。毎年一回節分の夜この燈籠に悉く燈明を入るゝ例にて、最も壯觀なり。鹿は春日名物の一にして神苑内に放ち飼へり。其數無慮數百。春日野より公園の邊到處に或は芝生の上、或は小流の畔、或は路傍に、或は樹陰に、三々群を爲し、或は五々隊をなして、人の袂を曳きて食を乞ふさま洵に愛らし。毎年秋季に行ふ鹿の角切は頗る盛にして、遠近より見物人甚だ多し。春日若宮は本社南に在り。瀬織津姫命を祭れりと云ふ。灯ともすや露の滴る石燈籠。雨の日や、昔顔なる奈良の花。子に臥して鹿に起され奈良の宿。これより嫩草山に到る。三笠を聯ねたるが如きを以て俗に三笠山と云ふ。満山小芝生にして山容溫藉宛然土佐繪を見るが如し。聞けば毎年二月中旬の山焼あり。偉觀自ら人をして快哉を叫ばしむ。春日山は此峯續きにて共に奈良の東方を擁す。天の原ふりさけ見れば春日なる三

笠の山に出でし月かも。阿部仲磨。手向山八幡宮に詣つ。楓の名所にして三笠山の北に隣りし聖武天皇の御願に依り宇佐より遷し奉る。即ち東大寺の鎮守神なり。菅公の詠めるこの度はぬさも取敢ず手向山紅葉の錦神のまに。の句胸に浮ぶ。尙校倉を視て正倉院に行く。我が國無雙の寶庫にして、天平勝寶八年六月二十一日孝謙天皇先帝聖武の遺物を東大寺に納付し、校倉を建て之を藏せしめらる。之を正倉院と云ふ。此寶庫に藏するものは聖武帝御遺愛の貴重品のみにして、後代美術の模範と仰がれ、宮内省の所轄とす。師範學校に行く。八重櫻は學校内に在りて古の奈良の都の名残を留め居れり。古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬる哉。是より興福寺に至る。興福寺は藤原氏の氏等にして、昔時は境内堂宇共に宏壯を極めしが、今は其二三を残すのみ。金堂文殊堂五重塔等を存す。文殊堂の前にあたり一株の松樹枝低く地面に蔓りたるものあり。花の松と稱す、五重塔は境内の南端にありて建築の宏大なること驚くに堪へたり。南圓堂は金堂の西南に接する處にあ

り。八角形を爲す、中に觀音を藏す。春の日は南圓堂に輝きて三笠の山に霧る、薄雲。暫時北圓堂の邊に徘徊す。何處ともなく春日神社の神鹿悠々紅楓綠樹の間に相戯れつゝ我等の袂を曳く、實に言ふべからざる趣あり。若草山は東方模糊の中に聳ゆ。夕陽はや西山に没して奈良市は髣髴の間にあり。やゝありて一同宿に着く。或者は早速椽側に這出でて手紙を書く。その態度何となう床し。暫くにして晚餐を終へ一同外出を爲す。我等は先づ猿澤池に到りて夜景を眺む。又美觀なり。靜かなる波間に照す月影を見るも樂しき猿澤の池。生徒一同十時に床に就く。されど暫くは雑話の中に時を過す。

## 十一月五日

六時起床七時二十六分奈良驛を發し、畝傍に向ふ。畝傍驛に着すれば我等一二年の時英語を教はりし馴染深き谷口先生さも笑顏をもて迎へ給へり。下車して先生の御案内の下に神武天皇御陵橿原神宮へと歩を運ぶ。神武天皇東北陵は畝傍山の東北の地數町を占めて瑞籬いと貴く結びめぐらしたり。我等旅衣の塵打拂ひて御前に額づ

く昔天皇天祖の遺訓を奉じて此處に皇基を定め給ひしより、今に至る迄殆ど三千年。君臣の分明かに父子の親厚く世界に類なきこの一大帝國を成し給へり。我等はこの御陵を拜して限なき感慨胸に溢る。古をしのぶ袂に通ひけり畝傍の山の峯の松風。畏くも額づく袖に散りけり畝傍の山の松の下露。など思ひ出でて漸くに御前を退く。さて耳無山、天香具山の古き事など更に語り合ひて、橿原神宮へと志す。神武天皇御陵より十町實に皇祖神武天皇の即位せられたる橿原の宮居の址にして國家發祥の靈地なり。天皇茲に即位まししより今大正十一年迄正に二千五百八十二年。國威四海に輝きて東亞の霸權我手に在り。拜殿に額づきて往事を思へば染々帝業の偉大なることを覺ゆ。是より久米寺に到る。神宮より南二町餘あり。聖德太子の御弟來目皇子の創建なり。女の白き脛を見て通力を失ひ、天より落ちたる久米仙人の建立とも傳ふ。觀音堂には糸仙人の坐像をも置きたり參詣し終りて畝傍驛へと急ぐ。途中大通りの南部に渡りて畝傍公園設備に着手せり。又先生と語り出

でて驛に着くを知らず。汽車發するに及び又もや見送り給へる如何に感謝すべきや。高田驛へと吉野口にて乗換へ十二時四十八分漸く吉野驛に着す。是より吉野山に登る。途中黒門ありて其處より一丁毎に石標立てり。當日天候は良けれど惜しい哉櫻の季節に非ざるは、二十八町目に例の村上義光忠烈の碑あり。豊太閤花見の蹟等もあり。三十町目邊は所謂一目千本の名所なるが、紅葉の候に變せり。されど谷と櫻木と丘との具合は頗る美事なり。我等先づ吉野宮に參拜す。官幣大社にして後醍醐天皇を祀る宮を出でて漸く辰巳屋旅館に着く。暫く休憩して愈吉野山の光景を實地に訪ふ。町も丘の脊の上に建ち、谷に俯し崖に凭りたる形實に面白し。然も隔て、藏王堂の屹然と聳たるさまは人目を聳だしむるに足る。町の盡きたる所に黒門あり。銅の鳥居あり。續いて仁王門あり。即ち金剛峯寺の總門にして、大なる藏王堂は實にその金堂を成す。案内人に連れられて藏王堂に行く。本堂は康正元年再建し慶長十九年豊臣秀吉の修理せしものにして規模頗る雄大なり。大塔宮の吉野

落の時離杯を擧げられたる址は本堂の前に今も残  
りて大きな四本櫻依然として其處に生ふ。南朝の  
歴史は一々目前に現はれ来る如き氣分せざるを得  
ず。此處より三丁にして吉水神社に向ふ。例の後  
醍醐天皇の「花に寝てよしや吉野の吉水の枕の下  
に岩はしる音。」と詠まれたる吉水院なり。勝手神  
社に志す。勝手明神社は源義經の妾靜御前の法樂  
の舞を奏したる所なり。それより本道を左に折れ  
て谷を七町餘行きて突當れば、如意輪山の下に如  
意輪寺あり。「正行かへらじとかねて思へば梓弓な  
き數に入る名をぞとむる。」の歌を扉に刻したる  
ところにて、今も其扉は其處に藏さる。堂の奥に  
後醍醐天皇の御陵あり。北面して立てり。藤井竹  
外の「古陵松柏吠天驄、山寺尋春春寂寥、眉雪老僧  
時輟帚、落花深處說南朝。」の絶唱は實に此處にて  
賦したるなり。再び本道に戻り南二丁に竹林院、  
天王櫻、猿曳阪あり。こゝより東の谷を望めば風  
景の美、筆紙の盡す所に非ず。此處を中の一目千本  
と云ふ。尙水分神社に到る。略吉野を歩いて漸く  
宿に着く。太陽はや西山に傾かむとす、湯に入り

て夕飯の膳に就く。一日の疲勞恢復して間もなく  
寢に就く。

十一月六日 六時床を離れ急ぎて宿を立つ。歸  
りは以前と異り、所謂山谷を縫ふ山路を辿りて驛  
へと歩を進む。遂に六田ノ渡を経て吉野驛に到る  
午前八時二分此處を發して高野山にと志す。汽車  
は吉野川と溪流に添ひ山間を切抜けトンネルを過  
りて急速力を増す。遂に吉野口にて和歌山線に移  
りぬ。若干の小さき驛に立寄りつゝ午後一時四十  
五分、漸く高野口に着く。下車すれば京都眞宗中  
學も來りあり。京中は喇叭を合圖に直ぐ出發す。  
驛前の東雲館に厄介物を預け、身輕なる扮装して  
山路三里二十六町の行路を一步々々と前方に踏出  
す。道路は意外にも平坦にて歩むにも難作なく、  
自然と足並早くなり、競争勝ちにぞなりにける。  
途中九度山村の眞田幸村の墓に詣づ。又一行は愈  
元氣克く前進す。實に二里半餘は良き道路なり自  
動車、馬車自由に往來す。喉乾きて渴を催せば路  
傍に聳つ巖の隙間より冷水竹管より流出して我等  
を待つ。霜月の上旬と雖も秋の日和にて登ふにつ

れ洋服いつしか汗ばみたり。やがて蜿蜒逶迤遂に  
坂路を攀づに至る。一團體ももはや三々五々益々  
その間隔を甚だしうす。朱塗の橋が目前に迫つ  
た。所謂極樂橋を過ぎて愈々是より極樂淨土の途  
に就く。これより以前に不動坂あり。其處よりは  
一層山路峻しけれど改道後なれば案外容易なり。  
されど足の疲るゝに及び誰しも四町三町と喘がぬ  
者なし。汗を拭ひ上衣を脱ぎて漸くにして女人堂  
に着く。一人の小僧我等を迎へに來れり。最早薄  
暮ならむとす。二三町下りて福智院に着く。茶を  
飲み少憩後刈萱堂及奥の院に案内せらる。一の橋  
を渡れば兩側に無數の石塔矗立して灰白く見ゆ、  
如何にも薄氣味惡き處なり。且小僧の九諸記の説  
明は我等には馬の耳に風の如し。宿に歸りて小僧  
の給仕に精進料理の夕飯を喫す。以前に高野山中  
學より武術の試合を申込む。されば大部分は外出  
と聞きて直ちに彼中學に應援に行く。彼等は極力  
努力すれど我等の選手は何とても疲れ果てたる事  
とて敵對する能はず。遂に敵の勝利となる。退き  
て又森々鬱蒼たる神社の境内を通りて宿に歸る。

寢室に繪葉書杓子其他土産物等を賣りに來る。十  
時迄は雜談一層かまびすし。十一時熟睡す。

十一月七日 午前五時半起床す。福智院を出立  
して昨日殘せし名所舊蹟を訪問す。總本山金剛峯  
寺等に來りて建築の壯大なるに驚く。先づ第一に  
眼に留るは佛像其前の場所の廣き事恰も座敷の如  
くなれり。大廣間これなり。次の間は梅の間梅花  
の描寫せる襖あり。隣りに柳の間あり。關白秀次  
切腹の間と聞く。そゞろに往事を思ひ起す。一廻  
りして大門を見る。兩側に丈六の金剛力士侍る。  
其裏に出で、遙か彼方を眺望せば、ほのかに細長  
き黒點在るとしもなくちらりと見ゆ。案内者淡路  
島と言へり。これより靈寶堂に行く。寶物殊に彫  
刻物を拜觀す。終りて宿坊の前にて整列し、愈々  
高野山を下る。トン／＼拍子にて三里餘の道を走  
る。小走りにて漸く東雲館に着く。早速辨當を口  
にと運べば、忽ち元氣恢復。午前十二時四十一分  
高野口驛を發す。最早高野山も模倣の中に見ゆ。  
此處一帶は未だ田に黄金の波を漂はせたり。汽車  
の中にては昨日以來の疲にて大部分寝ねたり。誰

しも自然の風景を味はうとはせず。其れも其筈皆夢寐の中にてより以上の風景を見ればなり。汽車はざん／＼和歌山平野を突破す。志野川はいつしか紀ノ川となりて、緩かに且鐵道傳ひに流る。和歌山市と驛夫の聲に樂しき夢を破られて下車し、午後二時電車にて市驛を出發す。沿道には和歌山城、根上りの松等あり。紀三井寺にて下車し、寺に參拜す。此處は西國三十三番の内二番の札所なり、暫く休憩の後又電車にて宿に到着す。やれ／＼と足を伸して座敷に上るや横になる。時に三時半思ふ存分皺を延して午後四時宿を出で、先づ玉津島神社に詣る。此處は衣通姫を祭る。此の北なる東照宮は山の下より拜して過ぐ。是より約十町進めば第一トンネルあり。第二トンネルあり。暫く行けば道二つに分る。先登は下へと路を取る上松先生に隨へる者は上へ登る。やゝありて高き物見臺に座を占む。此處の岩石は一種異なる格好を爲し恰も板を重ねたる如くなれり。一同何れも四方に眸を放つ。東方は灣入して其頂に青松麗はしく植はられたり。漁船沖に出でて一層美觀を添

ふ。西方を眺望すれば遠くは淡路島近くは片帆眞帆等重げに風を孕む。折柄夕陽雲を離れて今や西海に沈まむとす。太陽の光波に映じてキラ／＼と金色の目に輝く様宛然畫圖の如し。一同身の在所を忘れ果て恍惚として此風景に憬る。暫くにして太陽既に没し、ほの暗くなりたれば、ホット氣付きて宿に歸る。夕食終つて先生の「十一時迄外出許可」との傳へに一同思ひ／＼に出で行く。和歌浦停留所にて札を買ひ電車の止るや飛乗れり。大抵は本町迄の切符なり。和歌山市は流石に御三家の一紀州の都なり。第一電車の通ずる所、從つて道路も廣く、他に宏大なる建物は無きも、シヨウウインドーは立派なり。或ひは呉服太物或ひは野球道具等奇麗に飾り立てたり。宿に歸りて漸く一時寢に就けど幾度睡らうと欲するも、今夜が最終かと思へば知らず感情高まりて熟睡困難なり。纔かに十二時過に至りて眠に入る。

十一月八日 旅行の第一日より好都合にて雨に降られたることなく、無事三日は経過せしも、本日を出づれば、雨天の模様、是こそ皆の不足な

## 大和アルプス大峯山登山の記

堀川辰之助  
二橋 五男

### 一行

高坂先生 笹野先生  
堀江喜一 山田國三郎 藤本吉一  
廣田繁三郎 門野徳三郎 田中武三郎  
有元久雄 福山松太郎 天方健一  
堀川辰之助 二橋五男

り。朝一時間後れ遂に八時五十分和歌山市驛を出發す。我等は南海電車に送られて北へ／＼と前進す。龍神にて下車し堺の水族館に入る。何れも驚くべきものののみなり。殊に目を驚かせしは鯨の骨骸なり。終りて十二時迄に龍神驛前に集合せよとの條件にて暫時解散す。急ぎて辨當を食ひ驛前に集へど全部居らざりし故、一組先づ天王寺へと志す。本年は大阪にベスト蔓延せる事なれば汽車にて素通りを爲す。天王寺にて城東線に乘替へて大阪に着す。午後二時五十分發の列車迄には約二時間餘裕あれど如何ともする能はず。己むを得ずプラットホームに時を経過す。時間は來れり。漸く東海道本線に乘移りて懷しき彦根へと一歩々々接近し始めたり。間もなく京都も過ぎ逢坂山の隧道を貫通し大津を経。乗客としては我等の車に殆ど無く唯我等生徒一同の乗込むのみなり。是より皆得意の妙技を振ふ。異口同音に合唱する等實に騒々し。されど我等の最後の印象を與ふ。午後六時過ぎ漸くにして馴染ある彦根驛に到着す。一同は驛の中にて萬歳を唱へ遂に解散す。

第一日 我等彦中山岳部は高坂先生を一行の隊長といたゞき、大峯山登山の途にのぼらんとし、七月廿六日朝早く彦根驛に集合し、六時二十一分の汽車にのり、霞める金龜城を後にして安土・大津となつかしき湖邊を一走り程なく京都に着いた。一行は各自附近を散歩し、再び汽車にのり、王寺に向ふ。王寺より乗りかへて吉野口に達し、いよ／＼吉野鐵道に打ちのり、吉野に到る。之より我等の脚次第に慣れ道中一同大に元氣、遂に「六田の渡」に到る。橋上にて一同撮影す。多くの大峯山より歸途の人に出會ひ、血しきりにおどる。しばらく歩む程に道は山路となり、杉の林の間を

くぐつて歩むおから、老鶯の一聲我等を歓迎するかの様である。吉野へ何丁この石柱をかぞへつゝ吉野神宮に参拜す。こゝら櫻多くしばらく行き忠勇無双の村上義光の墓に詣づ。そろ／＼人家も見ゆる。大元氣にて歩んで居ると、一人の白の陣衣を着た男が先生と語つて居る。聞けば竹林院の者である。察するに此男は我等が汽車の中で宿坊の如くなつてゐるを知らずに學校の證明書を出して一泊を願はうと言つてゐたのを人から聞いたらしい。

先づ藏王堂に行くと彼男依然としてついてくる見物してゐる内に小雨が降り出し、どうどう我々は竹林院に一泊するととなり、荷物を托して吉水神社に向ひ、後如意輪寺にいたり寶物を參觀し、やうやくつかれた足を引きつづて竹林院に入る。まづ洗足をし上にあがる。先の男に我等の室をしめされ、入れば先に來た者は早浴衣を來てゐる、先生などが先に湯に入られ我々も浴場に行けば水と湯の二槽がある。水槽の方は信者達がいゝらしい。湯もすみ夕食をとり、後第一報を家等に發し

下におり、杖や杖の先につける鈴などを買い、再び二階に上る。床がどつてある、笹野先生は蚤ごり粉をまいて下さつた。併し少し寝る内に「蚤だ蚤だ」と騒ぎたてゝ一同ねられず。

第二日 バツと目を開く。まだ騒いでゐる。時間とは問へば十二時前、もう睡られないので、豫定を一時間早めて一時出發にしようと言ふので、藤本君が早速下へ言ひに行かれた。歸つて宿の者が承知した由をつけられて、皆は飛びおき便所に行きやら洗面やらで又一騒。身支度して朝食をとり、草鞋を水に浸して、はき方も習ひ、はいて見れば成程足の具合がよい。聞けば今のは朝食にあらずと。もう一度朝食するのだと。宿で一しよになつた行者は宿の提灯一つ持つて鈴の音をさせながら闇の中に消れて行く。我々は案内者につれて五六人の者が提灯を持つて正一時出發す。竹林院を出發したのも着いた時も闇で充分美しい所の見なかつたのは残念至極。我々もジャラン／＼チリン／＼といはしながら、夜半の街を歩く。星が光つてゐる。案内者は速歩で歩む。こう續か

ないと思つてぶら／＼と歩んだ。流石にあたりが静かなと淋しいのとで恐怖の念が一時に湧き立つ。峻阪をあがり眞黒な森の間を提灯の光だけを便に歩み、一つの山門につれ行かれた。中にはいると今起きたばかりの神官や世話人らしい人が眠むさうにして居る。此の神社は水分神社といつて初登山者の身體を清める處だと、一人の男の永々しい説明を聞き、最後に神官が御幣を振つて例のむにや／＼をやつてもらひ、最後にお札を買はさる。又こゝを發し阪をのぼる。大分登つて又明い處へ出た。一軒の茶屋があつて、その前に小さい社がある。これが大峯地主の神をまつてある金峯神社といふのだ。「さあ來なはれや」といふので、ついて行くこと少し下つて、すごい處へつれて行く。かすかに堂が一つ見ゆる。此が隱堂といつて義經が此の山に逃げ來り逐はれて窮して此の堂に逃れかくれたといふ。此の堂は以前もつと大であつたといふ。堂前は少し明く子供が此の中へはいれど押込む。中はまつくらで恐しくなつてくる。これを廻れといふ大きいと思つたら小さい。子供は大

聲にて「吉野の山の隱堂……」と言ひ終るや、「さあ言ひなはれや」といふ。恐しいから皆大聲でうなる。こは／＼ぐる／＼まはる。途中私は恐しいから戸をあけやうとした時、デヤン／＼と鐘をならした、時の恐しさ。外に出れば一同顔色が無い實際こんなすごい目にあつたことはない。聞いて見ると笹野先生は一ツ處でまつて居たと。元の處に歸り、御幣を振つてもらひ御札を買はされ番茶を喫し又登る。案内者の話によると此より以上は女人禁制で女が登ると山がなると。どん／＼のぼる内に一行は三組に分れた。案内者と二三人一緒にまつて行つたらしく、中に私も交り一ばんの後殿に先生と二三人。山はいよ／＼深く、杉の香高く、提灯は折々消れて心細い。しばらく來ると茶屋がある。そこで待ち合せて後の組と一緒に、又登る。こんな所に人が居るかと思ふ。又登ると聲がするので、ずつと見ると提灯を振つて居る者がある。こちらよりも「オーイ」と叫んでやる。火は消れて行く。前の組とは確かに二十町はへだたつてゐる。やつと提灯をふつたらしい所に來り一服